

1. 家政学の対象は人間の生活でなければならない。家政学以前の「生活」についての分析・研究が足りないように思えるので、それらについて研究をこころみた。

2. 「生活」のとらえ方を自然科学・社会科学の両面から考えてとらえたので、自然科学的な実験方法によって研究せず、歴史的文献や生活現象等から帰納的な方法によって研究を進めた。

3. 「生活」を、(1)生活の目的、(2)生活の属性、(3)生活の基本、(4)生活の構造の要素、(5)生活の構造図式に分けて研究した。(1)の目的は、自己保存と自己発展のためどのような生活手段を考えるか、(2)の属性については3点にしぼって定義し、生活の価値観と対応についてつぎの(3)の生活の基本へと関係させた。(3)の基本は歴史的考察から出発し人間性をじゅうぶんに研究して、これが生活を考える骨子となった。(4)の構造の要素として「中核となるものを人間の生命の保持」とおさえた。生活は人と、環境の親和であること。個人と社会はもともと人間の両側面にほかならない。人そのもの側面と、生活思想を基盤にし、外界にどう適応しているか、人の生活を大きく分類して、一つは体験を通し、一つは、表現であること。そしてこの両側面が統一されたところに人間の生活の姿が認められる。表現の部分が欠如するところに、生きた人間の姿は認められない。そこに技術・時間・効率等の実践行動がある。この要素により(5)の構造図を考えた。